

望ましい人間関係を形成する学級活動の指導の工夫 ～学級の一員として主体的に実践する生徒の活動を通して～

豊見城市立長嶺中学校教諭 横田純子

I テーマ設定の理由

平成20年の中央教育審議会答申の中で「自分に自信がもてず人間関係に不安を感じたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりする」とある。それを受けて今回の学習指導要領の改訂では、特別活動の目標の中に「人間関係」の文言が加えられ、各内容の目標の中にも「人間関係」という言葉が付け加えられた。

特別活動は、実際の生活経験や体験活動による学習、すなわち「なすことによって学ぶ」ことを通して、全人的な人間形成を図るという意義を有していることから、特別活動の目標を達成するため教師は、生徒の実態に応じて意図的に活動場を設定し「望ましい集団活動」を展開していく必要がある。特に「学級活動」において学級成員に共通する問題を取り上げ、それらを解決するための自主的、実践的な活動を通して学級や学校の生活づくりを図っていくことが必要である。

本校3年生の対象学級にQ-Uを実施したところ、学校生活意欲総合点が70点以上の生徒が学級の71%と非常に高く、学級生活満足群に49%の生徒が入っていた。この実態から見て、現時点で支持的風土のある学級が形成されつつあると考える。しかしながら、学習指導要領に示されているような「集団の目指すべき目標や集団規範を設定し、互いに協力し合って望ましい人間関係を築く」ような集団活動は十分になされていない。

これまでの学級活動を振り返ってみると、年度初めに学級で話し合い、学級目標を決定してはいるが、学級目標達成を意識した取り組みが弱く「望ましい集団活動」として展開する事ができなかった。その原因として、学級目標を学級成員に共通する目標にまで高められなかったことや、学級への所属感を高め、生徒一人ひとりが本気になって取り組めるような集団活動を実践するための手立てを講じていなかったこと等が考えられる。

本研究は、進路選択、決定を控えている3年生を対象に実施したものであり、学級活動の内容(3) 学業と進路の ア、学ぶことと働くことの意義の理解 エ、望ましい勤労観・職業観の形成と関連している。「何のために働くのか・何のために学ぶのか」という視点で生徒の実態にせまり人の役に立つことが生きがいにつながっているというところまで生徒の意識を高めていきたい。そして、「学級の一員として学級の役に立つ」という共通の認識に立った上で、現実に目を向けさせ学級目標達成のために何ができるのかを話し合い、学級集団が本気になって取り組む共通の目標を設定させる。その上で「自分は〇〇を実行する」と具体的な行動目標を自己決定し実践することで人の役に立つということを観念ではなく、実感を伴う実践活動として展開していきたい。

これらのことから、学級目標達成に向かって主体的に実践する集団活動を通し、学級への所属感、自己有用感を高め、望ましい人間関係を築きたいと考え本テーマを設定した。

II 研究仮説と検証計画

1 研究仮説

学級において「学級目標(共通目標)達成のために何が出来るか」という話し合い活動を行い、具体的な行動目標を自己決定し、実践することによって、学級への主体的な関わりや学級の一員として役立つ自分を自覚し、学級への所属感や自己有用感が高まり、望ましい人間関係が形成されるであろう。

2 検証計画

(1) 事前調査	<ul style="list-style-type: none"> ・「将来の夢と学習について」「学級での活動について」のアンケート (6/13) ・調査対象 長嶺中学校 3年1組 		
(2) 検証授業	検証の場面	検証の視点	検証の方法
	①教師のプレゼンをもとに、働く意義・生きがい・学ぶ意義について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・人の役に立つことが生きがいにつながることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート
	②ゲストティーチャーの話を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・夢に向かって努力することや進路選択について学び、将来の見通しをもつ。 ・誰かのためにという強い気持ちが、夢を叶える原動力になることを実感する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート
	③学級目標達成のために何ができるかを話し合い、学級の実践項目を決める。	<ul style="list-style-type: none"> ・学級の一員として真剣に話し合いに参加しているか。 ・学級が一つの目標に向かって、本気になって取り組んでいるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業観察 ・ワークシート
(3) 事後調査	④実践項目の中から個人として実践することを決める。	<ul style="list-style-type: none"> ・何をどのように実践するか、自己決定することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践カード
	<ul style="list-style-type: none"> ・実践カードの回収と分析 		<ul style="list-style-type: none"> ・実践カードの分析
	<ul style="list-style-type: none"> ① 実践項目を自己決定することで主体的に実践できたか。 ②学級目標に向かって学級の団結は深まったか。 ③学級の一員として、学級の役に立っている実感があるかについて考察する。 		
<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの実施 (7/18) 		<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果の分析 	

Ⅲ 研究内容

1 望ましい人間関係を形成する学級活動の指導の工夫について

(1) 学級活動の目標

学習指導要領では「学級活動の目標」を次のように示している。

学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。

学級活動で育てたい「望ましい人間関係」とは、学習指導要領解説特別活動編によれば「豊かで充実した学級生活づくりのために、生徒一人ひとりが自他の個性を尊重するとともに、集団の一員としてそれぞれが役割と責任を果たし、互いに尊重しよさを認め発揮し合えるような開かれた人間関係である」とある。そのためには生徒一人ひとりが学級の一員としての自覚が持てるような取り組みを実践していく必要がある。特に学級目標を決める活動においては、学級全員の思いや願いが反映されたものにするための一連の活動を工夫していく必要がある。さらに、学級目標と関連させた学級活動の具体的実践を行うことが重要であると考えられる。

また、学級活動で育てたい「自主的、実践的な態度」とは、「生活の中で起こる様々な問題や課題について積極的に取り組み、解決していこうとする態度」である。そのためには、生徒が

本気になって解決したいと思えるような題材や議題を工夫する必要がある。学習指導要領解説特別活動編の中でも「集団の中で望ましい人間関係が築かれるに伴って、生徒間に自主的、実践的な態度の発達を促す相互作用が活発に行われたりもする」と示されている。このようなことから学級活動の中で、学級全体が共有する目標を達成するための実践を通して、皆が力を合わせることで一人ではできなかったことができるという、集団の力を実感させることが重要であると考えられる。

(2) 「望ましい人間関係を形成する」ための実践について

なすことによって学ぶという実践的な活動を特質とする特別活動においては、何を・どのように実践していくかという教師の計画が大切である。生徒の発達段階に合わせて、集団の成員が本気になって取り組める題材や議題を設定し、具体的な実践活動を通して優しさや思いやり、独創性や共に協力し合うことの大切さなど、なすことによって様々な教育的価値を学ぶことができる。

本研究では学級集団が一つの目標に向かう手立てとして「学級目標達成のために自分は、何ができるか」という話し合い活動を行った上で「自分は〇〇を実行する」と具体的な行動目標を自己決定させる活動を取り入れる。そして他と協調しながら、集団に埋没することなく個の良さを発揮し、実践することを通して主体的に関わる態度を育成することができると考える。

また、実践の中で「学級の一員として役立つ自分」を自覚し、学級への所属感や自己有用感が高まることで、望ましい人間関係を形成することができると考える。

● 「所属感」・「自己有用感」について

「望ましい人間関係の形成」にとって重要な所属感・自己有用感について考えるとき、アブラハム・マズロー (A・H, Maslow 1954) の唱えた「欲求段階説」(図1)が参考になる。

学級活動を欲求段階説にあてはめて考えると、安心できる楽しい学級が安全欲求であり、自分は学級の一員であると感じられる学級が所属欲求にあたる。そして、互いに尊重し良さを認め、発揮し合える学級が承認欲求にあたり、自己実現の欲求は、特別活動の目標である「人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」に通じる。

すなわち、学級活動において望ましい集団活動を行うことで学級への所属感や、自己有用感が育まれ、望ましい人間関係が形成される。その実践の中で、学習指導要領解説特別活動編に示される「自己の個性や能力・適性等を十分に理解するとともに、他者と共生しながらより充実した生活を送ることのできるような自己実現を図るための能力」を養うことができる。

本研究における所属感とは、自分は学級の一員であるという自覚であり、学級集団の中でそれぞれが役割と責任を果たす実践活動により育まれるものと考えられる。また、自己有用感とは、自分は役に立っているという実感であり、学級活動の中で、級友に認められる体験や感謝される体験を通して、役に立っている・必要とされているという思いを持ち、自己有用感が育まれると思われる。

そして、所属感・自己有用感が育まれることにより、学級内のコミュニケーションが盛んになり、お互いを認め合う言葉かけが増えることで、よりよい人間関係が築かれると考えられる。以上のことから、望ましい人間関係を形成するためには、互いに尊重し、よさを認め合い、発揮し合える学級を構築していくための、望ましい集団活動を展開していく必要があると考えられる。

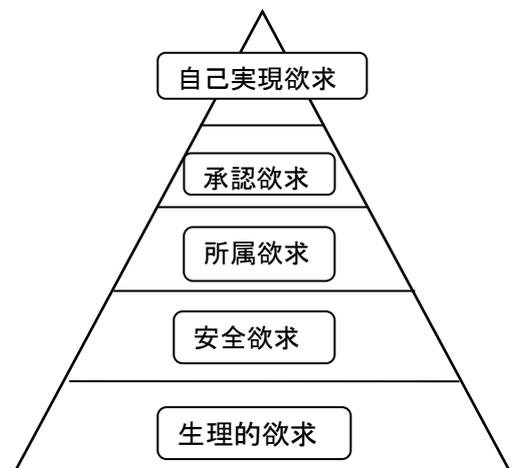


図1 マズローの欲求段階説

2 学級の一員として主体的に実践する生徒の育成について

(1) 学習指導要領解説特別活動編から

学習指導要領解説特別活動編の「学級活動」の目標の中では特に、よりよい人間関係を築く力と、生徒が当面する課題に主体的にかかわる態度の育成を重視すると示されている。主体的にかかわるとは、当面する課題を自分の事としてとらえ自分の問題として受け止める事だと考える。

特別活動においては自主的という言葉もよく用いられるが、自主的というのは当然やるべき事を自分から進んでやろうとすることであり、主体的は自分たちの課題を解決するために活動するという切実感をもって、自ら進んで活動することである。

(2) 主体的にかかわる意欲を起こさせるための手立て

生徒が当面する課題に主体的にかかわる態度を育てるためには、生徒が本気になって取り組めるような魅力的な題材や議題を設定させていくための指導の工夫が必要である。

本研究では、生徒が題材に対して本気になって解決していこうとする学習態度を育むための手立てとして、次のような実践を行う。

① 働くことの意味を考えさせる授業（キャリア教育の視点から）

進路選択、決定を控えている3年生にとって、何のために働くのか・何のために学ぶのかということは大変興味深い話題である。そこで具体的な社会事象を取り上げて、人の役に立つことが生きがいにつながっているというところまで生徒の意識を高めていきたい。そうすることで、学級の一員として学級の役に立つという共通の認識にまで高めていくことにつながっていくと考える。

② 地域人材を活用した授業

担任の話や、映像・読み物資料のみではなく、地域の職業人・保護者・卒業生等から特別活動の内容項目に関連した講話を聞くことで、生徒の実践への意欲がより高まるものとする。学習指導要領解説特別活動編にも「自分の身のまわりの人、働きながら学んでいる人、地域の職業人、あるいは生涯学習に取り組む人々などの体験談などを取り入れながら、自分なりの考えをまとめ、発表したり、話し合ったり、ディベートを行ったりする活動などが考えられる」とある。

③ 学級目標との関連を重視した授業

学級目標を学級経営の中で効果的に活かしていくためには、教師自身が学級活動の中心に学級目標を置き、その実現に向けて組織や取り組みの見直しを行うことが大切である。学級目標を共有させ、その目標に向かって全員で取り組む環境を与えることによって学級に連帯感（仲間意識）が生まれ、望ましい人間関係が形成されると考える。

本研究では、これまでの学級目標に対する意識と取り組みを見直し、3年生にとって最も切実な「全員合格」に焦点をあてた話し合い活動を行う。そして学級全員が一つの目標に向かって「本気」になって実践することを通して主体的にかかわる態度の育成を図り、段階的に学級目標の全項目について生徒が自主的、実践的に取り組めるような活動を工夫していく。

(3) 話し合い活動の指導の工夫

「学級・学校文化を創る特別活動 中学校編」（国立教育政策研究所）には、話し合い活動のポイントとして「一人一人の生徒が、目的意識や問題意識を明確にして話し合い活動に取り組むことができるように、事前の活動や指導を丁寧に進めるとともに、決まったことの実践化を図ることを重視する」「小学校の学級活動で身につけた話し合いの方法、役割分担などの経験を生かすことができるようにする」を挙げている。これらの視点をもとに、本研究では以下の工夫を行う。

① 導入の工夫

事前アンケートで実態を把握し、アンケート結果をもとに題材を設定することで、生徒に当事者意識を持たせ、主体的にかかわる意欲につなげる。

② グループの話し合いを効果的に行わせるための工夫

全員に発言の機会を与えるため、グループの話し合いを取り入れた。その際、グループ内の司会

用シナリオ（資料1）やマイク等の小道具を準備して、話し合いがスムーズに行えるようにする。

- ① これからグループの話し合いを始めます。
- ② みんなが考えた「みんなで絶対高校合格」のために「学級でできること」と「どんなところが学級の役に立つのか」を発表してもらいます。
- ③ まず、自分（司会）が最初に発表します。
- ④ 発表する人にはこのマイクを渡すので、マイクを渡されたら発表して下さい。
★発表しながら用紙に付箋を貼る。（同じ意見同士はまとめて・・・）
- ⑤ 班の意見をまとめます。
★グルーピングした意見を項目ごとに一つの文章にまとめる。

資料1 司会シナリオ

- ③ 効果的に自己決定させるための指導の工夫

学級で集団決定したことを実行に移すため、個人として具体的な行動目標（実践項目）を自己決定させる。その際、教師が適切で具体的な例を示すとともに、いつ・どこで・何を・どうする等、具体的な実践方法を考える視点をアドバイスする。また、何のために実践するのかという理由を考えさせることで目的意識を明確にさせる（資料2）。

「みんなで絶対高校合格」のために自分にできる（実践する）こと

1. 学級の実践項目を「自分はどのように実践する」か具体的に書きましょう。

(1) 具体的な実践方法	(2) 「みんなで絶対高校合格」のために役立つ点
○授業中は積極的に発表する。(特に社会と理科)	○授業が盛り上がっていい雰囲気になるから。

資料2 ワークシート

- ④ 実践の意欲化を図る

実践化を図るため、自己決定した実践項目を「実践カード」に記入させ、一定期間実践し、自己点検（振り返り）をさせる。生徒が意欲的に実践できるよう実践カードのネーミングを工夫し、誰でも無理なく実践できる適当な期間を一週間程度に設定した。

IV 検証授業

- 1 題材 学級目標「みんなで絶対高校合格」のために自分にできること

内容 (1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

- 2 生徒観

男女仲の良い明るい学級である。自分の意見をみんなの前でしっかり述べる事ができる生徒も数人おり、話し合う雰囲気も比較的良い。6月の中旬に取ったアンケートで「学級目標を意識しているか」という問いに対し「どちらかといえば意識していない・意識していない」と回答した生徒が85%。「学級目標を達成するために何か実践しているか」という問いでは「どちらかといえば実践していない・実践していない」が90%を占めており、学級目標に対する意識が低いことがわかった。

また、「学級の役に立っていると感じることもあるか」という問いでは「ある・どちらかといえばある」と回答した生徒が52.5%であった。生徒が役立っていると感じる場面は当番活動によるものが多く、学級目標を意識したものではないため、学級全体が日常的に学級目標の達成に向けて活動する工夫や手立てが必要だと考える。

3 指導観

これまでの学級活動をふり返ってみると、修学旅行や合唱コンクール等の行事にむけて学級全体が目標に向かって一丸となって取り組むことはあった。

しかし、生徒にとって学校生活を送る上での基礎的な生活の場である学級において、生徒が本気になって学級の諸問題について話し合い、その解決に向けて自主的・実践的に取り組む、日常的な活動が少なかったように思われる。

学級において望ましい集団活動を展開していくためには、生徒一人ひとりが共通する目標に向かって本気になって実践することが必要である。本学級に立ち返ってみると、学級目標は全員で決めたものの学級目標に対する意識も低く、達成するための取り組みが弱いという現状があった。

そこで、学級活動の内容(3)「学業と進路」で示されている、望ましい勤労観や職業観を育む活動を通して、人の役に立つという視点から学級目標の達成に目を向け、学級全体が共通の目標(学級目標の達成)に向かって本気になって学級のために出来ること(役に立つこと)を考えさせ、自己決定させて、実践させることで学級への所属感や自己有用感を高め、「望ましい人間関係」を形成したいと考える。

本時は、学級目標「みんなで絶対高校合格」のために何をするかを話し合わせ、一人ひとりに実践項目を自己決定させ「実践カード」に記入させることで、実践につなげるようにする。

4 指導計画

月日	活動内容	ねらい	望ましい人間関係づくりとの関連	望ましい集団活動
7/4	・「何のために働くのか 何のために学ぶのか」 を考える。	・人の役に立ちたいと「本気で思い」 「本気で語り」「本気で信じる」こ とが夢をかなえる原動力になるこ とに気づかせる。 ・現在の学びが、将来の職業(進路) につながることを自覚させ、主体的 な学びにつなげる。	・人の役に立ちたいと 本気で思うことで、 学級の思いを一つ にまとめる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 「人の役に立ちたい」と本気で思い「実践項目」を決定し 「実践」する </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-top: 10px;"> 学級への主体的な関わりと実践活動 </div>
7/10	・ゲストティーチャーに 学ぶ。	・ゲストティーチャーの話を聞いて、 進路選択や将来の生き方について 考える機会とする。 ・自分の将来に夢を持たせる。	・誰かのためという 強い気持ちだが、夢を 叶える原動力にな ることを実感する。	
7/11 (2時間 連続) 本時	・学級目標「みんなで絶 対高校合格」のために 自分にできる実践項 目を決める。	・学級目標達成のために「学級で実践 すること」を話し合い、自分の実践 項目を決め、実践することを通して 学級への所属感や、自己有用感を高 める。	・一人ひとりが、学級 の役に立ちたいと 本気で思い、「学級 のためにできる実 践項目」を自己決定 し、実践することで、 自主的・実践的な 態度を育む。	
7/14 ～ 7/18	・「実践カード」を基に 実践し、点検する。	・実践することを通して学級への所属 感や、自己有用感を高める。	・実践を通し学級のた めに役立つ自分を 実感する。	

7/18	・一週間の実践を振り返る。	・実践を振り返り、学級への所属感や、自己有用感を高める。	・自分の良さに気づき、友達の良さを認め受け入れる態度を育む。	
9月	・道徳との関連学級活動で実践した内容項目を扱う。	・特別活動で共通実践したことの補充・深化・統合を図る。	・実践に道徳的価値が加わることで、更に人間関係が深まる。	
定期的 に実施	・月に一回程度「実践週間」を設け、点検活動を行う。	・定期的実践することで「みんなで絶対高校合格」への意識を継続させる。	・学級が一丸となって目標に向かう姿勢が継続する。	

○関連した指導計画

活動内容	ねらい	望ましい人間関係づくりとの関連	望ましい集団活動
・学級通信による紹介	・一人ひとりの頑張りや、友達からの称賛を紹介することで、学級への所属感や、自己有用感を高める。	・友達に感謝されることで役立つ自分を実感し、自己有用感を育む。	
・朝自習や、放課後の勉強会の実施について学級で話し合い決定する。	・学級独自の勉強会を実施することで、全員合格への意識と学級の連帯感を高める。	・「全員合格」に向けて教えることで学級の人間関係が深まる。	

5 本時の学習

(1) 本時のねらい

学級目標「みんなで絶対高校合格」のために学級で実践することを話し合い、学級の一員として自分は何をどう実践するかを具体的な方法まで考えさせ、自己決定させることで、実践へとつなげる態度を育む。(2時間扱い)

(2) 本時の授業仮説

- ① 話し合い活動を通して学級の課題を自分の事としてとらえ、学級の一員として主体的に関わることができるであろう。
- ② 具体的な実践方法を考えさせることで、実践へとつながる行動目標(実践項目)を自己決定しやすくなるであろう。

(3) 学級活動(1)の評価規準

集団活動や生活への関心・意欲・態度	集団や社会の一員としての思考・判断・実践	集団活動や生活についての知識・理解
学級や学校の生活の充実と向上に関わる問題に関心をもち、他の生徒と協力して、自主的、自律的に集団活動に取り組もうとしている。	学級や学校の一員としての自己の役割と責任を自覚し、他の生徒の意見を尊重しながら、集団におけるよりよい生活づくりなどについて考え、判断し、信頼し支え合って実践している。	充実した集団生活を築くことの意義や、学級や学校の生活づくりへの参画の仕方、学級集団として意見をまとめる話し合い活動の仕方などについて理解している。

(4) 本時の展開

過程	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と 評価方法
導入 (5)	①「何のために働くか」の授業を振り返り、ワークシートの結果から、働く目的として、人の役に立つという考え方が増えていることを確認する。	・人の役に立つことが、生きがいに通じることを共通確認する。	
活動 の 展 開	②人の役に立つ具体的な体験として、学級目標の「みんなで絶対高校合格」のために学級でできることを考えて、付箋に書く。 ③グループ内で各自の考えを発表し合い、内容のグルーピングを行う。 ④各グループの意見を黒板に貼り、学級としての実践項目を確認する。 ⑤学級の実践項目の中から、自分が実践可能な項目について具体的な実践方法と、学級のために役立つ点をワークシートに書く。	・学級の一員としての自覚をもたせる。 ・話し合いが円滑に進むよう、司会のシナリオを準備する。(司会は事前に決定し、指導しておく) ・学級の実践項目を共通確認し、学級全体が一つの目標に向かって取り組めるようにする。 ・具体的な実践方法と役立つ点を2～3教師が例を示す。	【関心・意欲・態度】 ・学級の一員としての自覚を持ち本時の課題を自分が解決すべき問題として捉えることができる。 [観察] 【思考・判断・実践】 ・グループで協力して話し合い、意見をまとめることができる。 [観察] 【関心・意欲・態度】 ・「みんなで絶対高校合格」のために自分にできる具体的な実践と役立つ理由を真剣に考えることができる。 [ワークシート]
(90)	⑥グループ内で発表する。 ⑦1グループから順番に具体的な実践方法について、3つずつ発表する。(前のグループで出ていない項目を発表) ⑧各グループの発表を聞いて、自分の実践項目に追加したいものがあれば書き加える。 ⑨書き出した実践項目の中から実践可能な項目(3～5程度)を実践カードに記入させる。 ⑩数名の生徒に「実践項目」を発表させる。	・どこが学級の役に立つ実践なのか明確になるよう助言する。 ・具体的な実践につなげるようにする。	【思考・判断・実践】 ・「みんなで絶対高校合格」のために自分にできる具体的な実践項目を自己決定することができる。 [実践カード]
まとめ (5)	⑪ワークシートに授業の感想を書く。 ⑫教師の話聞く。	・自己決定した実践項目を「今日から実践すること」を確認し、これからの具体的な実践につなげることができるよう助言する。 ・各グループの司会を称賛する。	

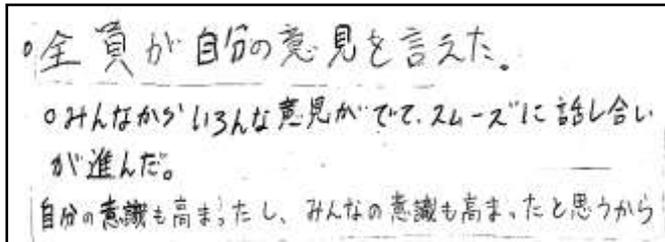
6 授業仮説の検証

本時の授業仮説について、検証授業における授業観察、ワークシート、実践カード、事後アンケートの記述を基に考察する。

(1) 授業仮説①について

話し合い活動を通して、学級の課題を自分の事としてとらえ、学級の一員として主体的に関わることができたか。

本時における話し合い活動の様子は、グループのリーダーを中心に全員が発言する等、活発に行われ、話し合い活動についてのアンケートでは、95%の生徒がよかった・どちらかといえばよかったと回答しており、その具体的な理由を記述している(資料3)。



資料3 学級の「話し合い活動」の感想

学級目標達成に向けて一人ひとりが真剣に考え、意見を述べていることから生徒が学級に主体的に関わっていることがわかる。じっくりと話し合い活動を行うため2時間連続の授業を行ったが、アンケート結果は適当な長さだった・少し短かった・短かったを合わせると8割を超え、充実した話し合いを行っている様子が見えてきた。

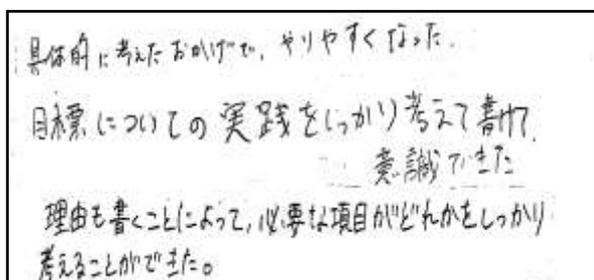
(2) 授業仮説②について

具体的な実践方法を考えさせることで、実践へとつながる行動目標(実践項目)を自己決定しやすくなったか。

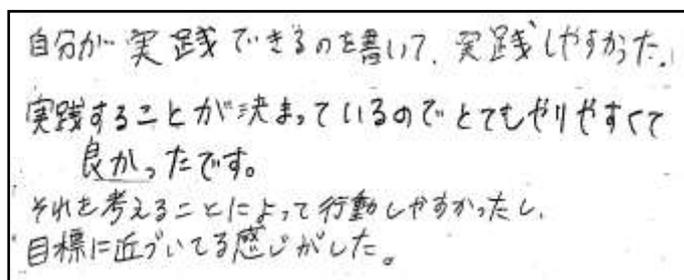
本時の前半で、グループでの話し合いを基に学級の実践項目共通確認させた後、自分はどのように実践するか、具体的な実践方法と学級に役立つ点をワークシートに記入させ、グループ内で発表させてから、自分が明日から実践する項目を決め自己決定させ実践カードに記入させた。

具体的な実践方法を考えたことについてのアンケートでは97%の生徒が、よかった・どちらかといえばよかったと回答しており、その主な理由に「具体的に考えたおかげでやりやすくなった」等とある(資料4)ことから、具体的な実践方法を考えさせたことで実践項目を自己決定しやすくなったと思われる。

実践へとつながる行動目標(実践項目)を自己決定することができたかという点に関しては、全員が時間内に「実践カード」に自己決定した実践項目を記入できており、実践することを自分で決めて実践カードに記入したことについてのアンケートでは、よかった・どちらかといえばよかったと回答した生徒が92%であった。その主な理由に「自分が実践できる事を書いて実践しやすかった」等とある(資料5)ことから具体的な実践項目を自己決定することで実践への意欲を高め、主体的な実践活動へつなぐことが可能になると考える。



資料4 「具体的な実践方法」を考えてよかった理由



資料5 「実践項目」を「自己決定」してよかった理由

V 研究の結果と考察

研究仮説の考察は、事前・事後のアンケート(6月、7月)の比較、検証授業のワークシート、実践カードの記述を基に行う。

学級において学級目標達成に向けての話合い活動を行い、具体的な行動目標（実践項目）を自己決定して実践することは、学級に主体的に関わる態度の育成や、望ましい人間関係を形成することに有効であったか。

1 実践項目を自己決定することで、学級目標達成に向けて主体的に取り組むことができたか。

検証授業で自己決定した実践項目を「実践カード」に記入して一週間実践し、生徒自身で自己点検を行った。日々の実践をふり返り「30分はできなかったけど、こまめにやっていた」等、具体的にコメントしていることから生徒が実践項目を意識して主体的に取り組んでいることがわかる(資料6)。

実践項目 (具体的に)	7/4	7/5	7/6	7/7	7/8	コメント
1 授業中おしゃべりしない	◎	◎	○	◎	◎	(7/4) 授業中にしゃべりしてはいけないのでやめた。
2 分からない所は友達や先生などにおしえてもらう	○	○	△	○	◎	うまくおしえてくれたおかげで、おしゃべりが減りました。
3 検定に向けて、30分はかならず問題をとく。	△	○	○	◎	◎	30分はできなかったけど、こまめにやっていたので、できました。
4 1日1冊の家庭学習帳をやる。	○	△	◎	◎	◎	1冊の家庭学習帳をやる。
5 毎日、あいさつをする。	◎	◎	◎	◎	◎	みんなに挨拶をするのが好きです。

資料6 実践カードの記入例

実践をふり返っての生徒の感想を見ると、実践項目を自己決定したことにより生徒自身の意識も高まり、学級目標達成のために主体的に実践している様子がわかる(資料7)。このことから実践項目を自己決定することは、主体的に取り組む態度の育成に有効であったと思われる。今後は「自己決定したことは必ず実行する」ことを通して、生徒達に自己決定の重みを実感させ、これからの学級活動につなげて行きたい。

私は、3つの項目を完璧にしました。家庭学習では、毎日出せなくて毎日「△」か「×」でした。でも、最後の日には、追いついて「◎」でした。教えるのは難しかったけど、友達に教えた。後、学級の人ともコミュニケーションが「前より」良くなったと思います。

一週間実践して、項目で決めたことに対して、とても意識がよくなった。

いつもは、全然意識していなかったけど、この紙に書くことで、意識するようになった!! 提出物も最初に出すことができたので、良かった。

資料7 実践をふり返っての生徒の感想

2 学級目標の「みんなで絶対高校合格」という共通の目標をに向かって実践することで「望ましい人間関係を形成」することができたか。

アンケートの回答から、全員合格という共通の目標に向かって、お互いに教え合ったり注意し合っている様子が伺える。生徒の記述の中には、友達に教えるという実践を通して「友達に上手く教えるために勉強しようと思った」というものもあり「みんなで絶対高校合格」に向けて実践する中で、より望ましい人間関係が形成されたと考える(資料8)。

・ほとんどの人が注意しあえるようになった。
 ・前より明るく仲良くなった!!
 ・クラスの中でコミュニケーションをとっている場面が増えた。
 ・分からないところを聞いて、相手も分かるようになったし、自分の理解もより深まってよかったと思った。
 ・教え方が下手だったので上手になりたいと思った。そのためにも、勉強しようかなと思った。

資料8 共通の目標に向かって実践した事による学級の変化

アンケートで3年1組が好きかという問いに、好き・どちらかといえば好きと回答した生徒が検証の前後で85% から97%に増えており、チームワークがあると思うかという問いに対し、ある・どちらかといえばあると回答した生徒が90%から97%に増加している。このことから、一連の取り組みによって学級の人間関係が密になり、学級に望ましい人間関係が築かれるに伴って学級への所属感が高まったと考える。

3 学級目標達成に向けて実践することを通して、学級の一員として役立つ自分を実感することができたか。

アンケートの結果から、検証の前後で学級の役に立っていると感じることが、ある・どちらかといえばあると回答した生徒の割合が52%から75%に増えていることから、学級において自己有用感が高まっていることがわかる(図2)。

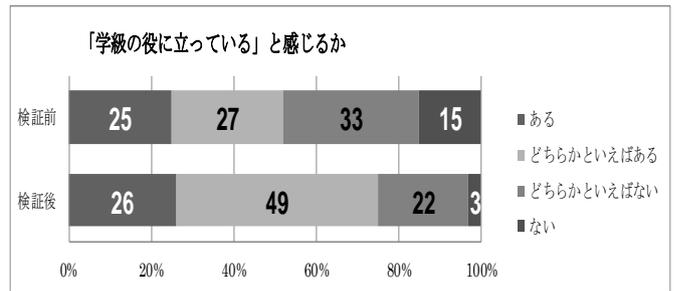
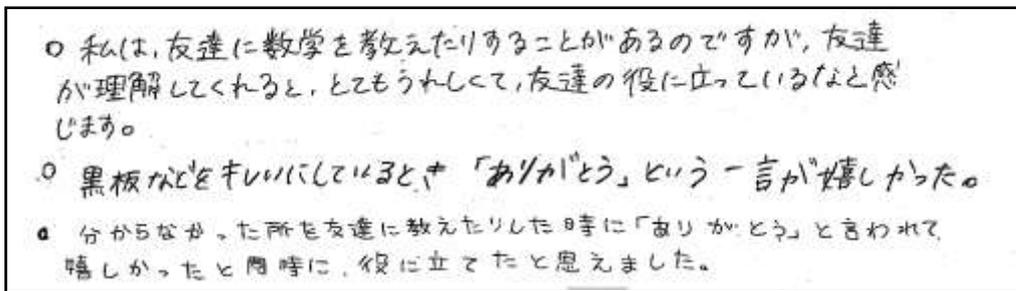


図2 「学級活動」についてのアンケート

実践カードの記述から、全員が学級目標達成のための実践を意識していることで、生徒の間に自然に教え合いや承認の声かけがおこり、そのことが学級への所属感や自己有用感を高め、望ましい人間関係の形成につながっていることがわかる(資料9)。



資料9 「学級の役に立っている」と感じたり「友達にしてもらってうれしかったこと」

4 実践後の学級目標に対する意識の変化

アンケートの結果、検証授業前は学級目標を、意識している・どちらかといえば意識していると回答した生徒は15%であったが、検証授業後は71%と大幅に増加している(図3)。実践についても、検証前は学級目標を達成するために具体的に実践している生徒は10%であったが、検証後は68%に増加している(図4)。

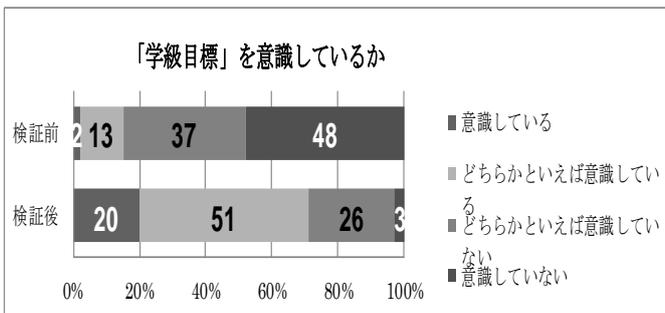


図3 「学級活動」についてのアンケート

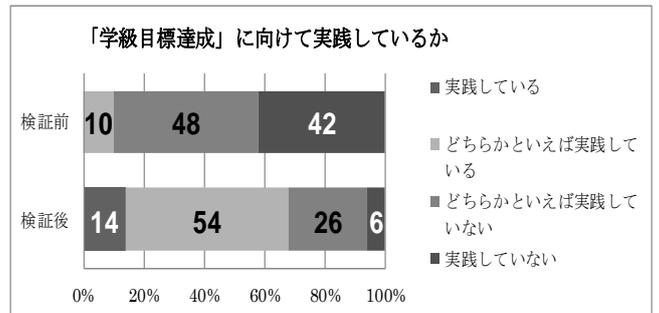


図4 「学級活動」についてのアンケート

生徒の記述にも「クラスのために何が出来るかを考えられたので自分のクラスに対する気持ちが変わった」「実践前は自分が出来ればいいと思っていたが『全員合格』のために、自分が出来たら人に教えるようになった」とあるように学級活動の「話し合い活動」を通して活動目標を共有し、目標達成に向けて取り組むことで生徒の学級目標に対する意識が高まっていることがわかる(資料10)。

行動面においても、何としても「全員で高校に合格したい」という切実な思いをもって自己の課題に取り組んだり、相手のために思って教え合ったり注意し合う等、望ましい人間関係の形成に向けてよい変化が見られた。

これらのことは、特別活動の特質であるなすことによって学ぶに通じるものであり、望ましい集団活動を通して望ましい人間関係を形成するためには実践が不可欠であるといえる。

○ワラスのためにためにできるかをかんがえられたので、
 自分、ワラスに対する気持ちが変わった。

○目標のために具体的に行動することが大事だと
 分かった。
 意識して行動できるようになった。

○いろいろな小さなことにも気を配れるようになった。
 例えは、"三落ちているゴミを捨てるかあいつつあるとか"。

○みんなが"高校合格したい"と強く思った。

○みんなが"注意などができるようになった。"

○前は自分が出来たらいいやって思ってたけど、
 「全員合格」っていうのを思い出して、
 それから、自分が出来たら人にも出来るよう教える。て
 いうことが出来た。

○一日一日の授業やガッツリサポートをかんがえるように
 思いました。

資料 10 検証授業後の「気持ち」や「行動」の変化

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 生徒が本気になって話し合い活動を行い、実践項目を自己決定することで、学級目標の達成に向けて主体的に実践することができた(V-1)。
- (2) 共通の目標に向かって実践する中で学級内で自然に教え合いや、承認の声かけが起こり、学級への所属感や自己有用感が高まったことで学級に望ましい人間関係が形成された(V-2・V-3)。
- (3) 学級目標の達成に向けて具体的な実践活動を行った結果、学級目標を意識して、目標達成に向けて実践するようになった(V-4)。

2 今後の課題

- (1) 生徒や保護者の願い、教師の学級経営目標を反映させた学級目標の立て方の工夫。
- (2) 学級全員が題材に対して、自分の課題として切実に捉えて取り組ませる(主体的)ための指導の工夫。
- (3) 話し合い活動で個が集団に埋没することなく、自分の考えや思いを発表させるための手立ての工夫。

【主な参考文献】

- | | | | |
|------------|------------------------------|-------|-------|
| ・文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』 | ぎょうせい | 2008年 |
| ・杉田 洋 著 | 『よりよい人間関係を築く特別活動』 | 図書文化 | 2009年 |
| ・国立教育政策研究所 | 『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』 | 教育出版 | 2011年 |
| ・国立教育政策研究所 | 『学級・学校文化を創る特別活動 中学校編』 | | 2014年 |